



(中種子町熊野神社所蔵)

志をもつて生きる

松寿院しょうじゅいん

江戸時代の大藩はんの姫様として生まれてきた人達は、どのような生活をし、どのような生き方をしたと思いますか。想像してみてください。姫様と呼ばれ、しずしずと着物のすそをさばきながら、お屋敷の中で過ごしているイメージでしょうか。

鹿児島の島津家から徳川將軍家に輿こし入れし、明治維新いしんで大きな働きをした天璋院篤姫てんしょういんあつひめは、NHKのドラマでもおなじみになりました。このような頼もしい姫様もいるんだと、新鮮に感じた人も多かったでしょう。

実は、この鹿児島には、歴史に残る素晴らしい働きをした姫様が、まだ何人もいます。中でも、種子島の発展

この章では、年齢は数え年で表記する。

【関連年表】

- 一七九七年 誕生
- 一八十一年 久道と正式に結婚。
- 一八二九年 久道死去。
- 一八四二年 久珍、種子島家領主となる。
- 一八五四年 久珍死去。
- 久尚、種子島家領主となる。
- 一八五七年 大浦川の川直し。
- 一八六一年 塩田の開発。
- 一八六二年 波止の修築工事の完成。
- 一八六五年 死去

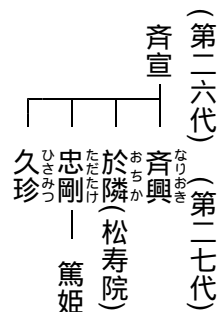
と人々の暮らしのために尽くした松寿院の生き方は、それまでの「姫様」のイメージをひっくり返すものでした。

松寿院は、一七九七年（寛政九年）、第九代薩摩藩主島津斉宣しまづなりのおぶの二女として生まれ、於隣おちかと名付けられました。

先ほどの篤姫の父である忠剛は、この於隣の弟であることから、於隣は篤姫の叔母おばに当たります。篤姫の將軍家への輿入れが決まり、鶴丸城に引越してきた時には、松寿院が色々いろいろと篤姫の世話をしたといわれています。篤姫もその時、松寿院の行動力や意志の強さなどから、学ぶことがあったのかもしれませんが。

さて、生まれて三か月で、於隣は種子島家へ輿入れします。と言ってもすぐに種子島に住むのではなく、今の鹿児島市にある種子島家の屋敷で育ちました。種子島家の父母と養育係の世話を受け、伸び伸びと成長したよう

【人物関係図】



【天璋院篤姫】

一八三五年（天保六年）、今和泉家第十代当主忠剛の娘として、現在の鹿児島市に生まれる。

島津斉彬の養女となり、徳川家第十三代將軍家定の夫人となる。家定亡き後は大奥を取り仕切り、新政府に徳川家の存続を働きかけるなど、徳川家のために尽くした。



（尚古集成館所蔵）

です。やがて、種子島家第二十三代島主の久道ひさみちと十四歳で正式に結婚し、四人の子どもを授かりましたが、残念ながら、みな幼くして亡くなってしまいました。その悲しみは深く、四人の子どもの戒名かいみょうが刻まれた花器が、今も残されています。

於隣は、その後また子どもを授かりますが、まだお腹が大きい内に初めて種子島に渡りわた、種子島の豊かな自然と島民の温かさに触れます。子どもを亡くした悲しみも、種子島にいてこそ癒いされていったのでしょう。

島に来てまもなく、於隣は夫の久道やその母とともに、西之表から南種子まで、島中を巡視じゅんししています。なんとこの時、八か月の身重みおもでした。今のように車で行けるわけでもなく、道も整備されてはいません。かなりの時間がかかる日程で、体への負担も大きかったと思われれます。しかし、それ以上に、島の様子を知ることや、島の人々



【戒名】
死者に与えられる名前。

【馬道を見る】

種子島家譜には、松寿院の動きが細かく記されている。その一八五七年（安政四年）の記録の中に「福山に至りて、牧馬を駆けるを覽る」とある。

これは、大隅国福山郷で毎年八月に行われた馬追い行事で、群馬を追い込み二才馬を捕獲するといふ勇猛なもの。これを見に種子島から現地へ出かけたときの松寿院は、実に六十一歳である。

とふれあうことへの意欲が強かったのではないだろうか。

こうして、於隣の種子島での日々が始まりました。そして、十年余りが過ぎ、三十二歳で久道を亡くした於隣は松寿院を名乗り、その後、第二十四代島主となった久珍の母として、種子島の振興に力を注ぎます。この頃も松寿院は、その持ち前の行動力を発揮して何度も島内を巡っています。そして、この松寿院の種子島巡りは、久珍が亡くなり、まだ幼い孫の久尚のために種子島家の事実上の「殿様」となってからは、さらに増えていきました。

例えば、このような様子です。

安政二年 住吉すみやし（三か所） 荃永くきななが（六か所） 野間のま
（三か所） 帰城 島中巡視 十七日間

【種子島久珍】

久珍は、松寿院の弟にあたるが、久道の没後、養子となった。

一八五五年。松寿院五十九歳。

【川直しについて】

南種子町平山を流れる大浦川は、海拔ゼロメートルで、川の中に海水が入り込み、米が作れなかった。

松寿院は、曲がった流れをせき止めて堤を築くことによって、新しく真っ直ぐな川を作り、川沿いの広い地域が美田として整備された。

【大浦川(安政川)川直しの碑】



安政三年 花里浜へ国上へ浦田へ安納へ現和へ帰城

上之郡巡視 九日間

安政六年 熊野権現に詣でる。屋久津から船で帰る。

熊野詣で九日間

毎年のように、島のおちこちを訪れています。中には、

このような記録もあります。

文久二年 馬毛島に遊ぶ。

十日間

まさに島中を巡っています。そうして松寿院は行く先々で、その度に、自分のするべき事業と、その方策を探っていたのでしよう。

松寿院の行った事業は、かなりの数に上ります。その中でも三大事業と呼ばれるものが、大浦川の川直しの工事と塩田の開発、西之表港の波止の修築工事です。どの

一八六二年。松寿院六十六歳

【塩田の開発について】

大浦川河口に塩田はあったものの生産が上がらず、他から多くの塩を買わなければならなかった。

そこで松寿院は、塩田を広げる工事を進め、製塩の方法も改良を重ねた。

二年ほどは思うような実績が上がらず、何度も監督を派遣して、技術を学ばせた。その結果、約三・八ヘクタールの塩田が完成し、屋久島へ塩を売ることもできるようになった。

工事も規模が大きく難しい土木事業で、かなりの費用と期間を伴い、知識と技術も必要になりました。これを行うに当たって松寿院は、事前に計画を十分練り、強い意志をもって決断したと思われれます。

最も大がかりだった事業が、波止の修築工事です。当時の種子島は、暗礁あんしやうの多さと、北西からの強い季節風のため、南海の交通の要所にもかかわらず、危険の多いところでした。天然の良い漁港もなく、多くの船が安全に島に出入りできるようにすることは、代々の島主の強い願いだったのです。「何とかこの事業を成功させたい。」という強い思いを持って、松寿院は動き出しました。

松寿院は、まず、薩摩藩さつまに援助を申し込みました。島の財政では難しかったので、計画書を提出し、許可を願い出たのです。それを受けて薩摩藩から調査にやってきた人々を、松寿院は家臣ともども、厚くもてなしていま

【波止】

海岸から海中に石で築いた防波堤。高波を防いだり、荷物の積み下ろしに用いる。

【暗礁】

海中に隠れて見えない岩

【鹿児島での松寿院】

鶴丸城での松寿院の立場は、男女合わせた中でもトップだった。

一八五一年（嘉永四年）、島津斉彬が薩摩藩主になったお祝いが鶴丸城で催されたが、斉彬が最初に対面した三名に、松寿院が含まれている。

【築港のための

牛馬による石運びの図】



（村川元子氏提供）

す。そして半年後には工事の許可を得て、年三百両の援助金を、四年間にわたり獲得しました。

次は、工事の担当者を自ら選んで任命しました。それだけ家臣のことをよく分かっていたということでしょう。また、広く島民にも協力を頼み、そうして島を挙げて、この事業に取り組んだのです。七千の船に、二万三千人に上る人夫、千二百両以上の費用をかけての大工事でした。

言い伝えによると、次のような様子だったようです。

「波止に使う多くの石は、山の方から運んでこなければなりません。そのため、港に向かう通りを毎日大きな石を積んだそりが通ります。そのそりを引く牛や馬が、一日に七十頭も往復していました。」

活動的な人ですから、松寿院もこの様子をながめて声をかけたかもしれません。港で指揮している担当者をね

【調べてみよう】

当時の人々は、男女でどのような立場の違いを持たされていたのだろうか。

【人夫】

土木工事などに従事する労働者。





ぎらったり、工事に参加している島民に様子を尋ねたりすることもあったかもしれませんが。

こうして実に五百四十日、途中の中断期間も含めれば約三年に及ぶ年月をかけて、新波止(沖の岩岐)の建設と旧波止(築島)の増築が完成しました。これまでなかなかできなかった、一大事業の達成です。島の人々の喜びは、どれほどのものだったでしょう。この工事の完成により、種子島の船も島外からの船も、安全に港の出入りができるようになりました。

松寿院は、工事に力を注いでくれた家臣たちに、ほうびも与えています。しかし、それ以上に家臣たちにとっ
ては、松寿院から信頼され、感謝の言葉をかけてもらうことが、何よりもうれしかったに違いありません。

現在の種子島の、西之表市のある家には、よく働いて

【波止修築工事について】

この波止は、今もしっかりと残っている。

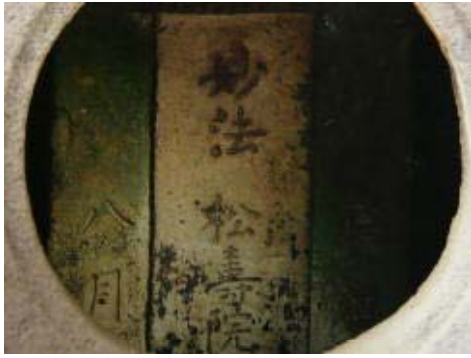
なお、沖の岩岐(新波止)と呼ばれる長い波止の大きさは、以下のとおり。

- ・長さ四十二間〃約七十六m
 - ・幅十二間〃約二十二m
- また、以前作られた波止を増築した築島(旧波止)は、次のとおり。
- ・長さ八間〃約十四・五m
 - ・幅六間〃約十一m

【松寿院の墓】



【墓の銘】(右の墓の中央部分拡大)



くれた家臣に松寿院が与えた「海苔^{のり}」が大切に残され、今に伝えられています。また、種子島家の記録からは、所々に「松寿院、宅を訪問」という意味の文が出てきますが、驚くほど数多くの家臣の家を訪問しています。松寿院が、それだけ家臣を大事に思っていた気持ちの表れでしょう。

多くの事業を手がけた松寿院ですが、その原動力は何だったのでしょうか。島主としての実績を残したいとか、自分の力を試したいなどといった目的のためではありません。そこにあるのは、自分を温かく受け入れてくれた種子島が少しでも豊かになり、人々が安心して暮らせるようにしたいという願いです。その願いを生^{しょうがい}涯の志として、種子島のために生きた松寿院。それを知っているからこそ、家臣や島の人々に尊敬され、親しまれてきたの

【考えてみよう】
家臣の家を訪ねて回った松寿院の姿から、あなたは何を感じるだろうか。

【松寿院最期の言葉】

わたしは、長らく病に伏して、皆々に看護のご苦労をかけてしまいました。ですけど、ついにこの時を迎えたのも天命です。わたしは、何も恨むことはないし、思い残すことはありません。

ただ、幼君久尚殿と宝慈院殿(久尚の母)の将来をこの目で見られないのが悲しみです。今後皆々この二人をよく助けて、島政をしっかりと執りおこなつように。

わたしは、これから永く地下で眠るでしょう。皆々この言葉を記録するよう願います。

(種子島家譜より意識)

です。

事実かどうかは分かりませんが、今でも南種子町の平山地区に住むお年寄りは、

「松寿院様は、ここの山を、案内役の者に背を押されて登ったもんだよ。」

と、親しげに語り伝えています。

松寿院は、いつまでも種子島にとって、誇らしい「女殿様」なのです。

【考えてみよう】

松寿院にとって、種子島はどのような場所だったのだろうか。



